

神田煙突づくし

水彩・鉛筆・紙・36.3×51.5cm・1981頃

木下 栄三

作品解説

「この絵は煙突専用のおもちゃ箱です」木下栄三は、自作「神田煙突づくし」についてそう述べる。1980年代はじめ、転勤で東京神田に通うこととなった彼は、古い商店や映画館といった風物に魅せられ、町を歩きながらそういった街の風物を次々と描いていった。煙突もまた、彼の心を捉えた。当時はまだ、ボイラーを重油で焚いていた頃。木下は自著で「学校、病院、事務所、などの煙突からは薄黒い煙がモクモク出ていて、印刷屋や喫茶店にも排気塔のような物がありました」と述べている。この作品は制作当初、あえて綿密な構成を立てなかったという。煙突を見つけては描き、別の日にまた新しい煙突を見つけては描き込んだ。しかし、数には限りがあり、描いていくうちに所々空白が出来る。空白が出来ると、そこを埋める煙突を探して歩き回った。作品の中に、換気扇なのか煙突なのか見極めがたいものも混じっているのはそのせいだ。眺めているうちに、神田を散歩している気分になるのは、作品そのものが、まるで散歩をしているような過程を経て描かれたことによるのかもしれない。